



小澤 勇夫

日本能率協会コンサルティング
取締役社長

らい 癡王のテラス

自分の原点がいつ形成されるのかは、人それぞれでしょう。私の場合は、都立戸山高校に通った3年間だと思っています。

1年生の数学の最初の授業で、「ゼロとは」という講義が始まったときには、とんでもない高校に来てしまったと思ったものです。ほとんどの先生がこの高校で数十年も教鞭を執っているという、旧制中学の名残がまだ残っていた時代です。物事の本質を追求するという姿勢を鍛えられました。

サッカー部で校庭の土を舐めたあの味、繁く通ったジャズ喫茶のタバコの香り、輸入レコード店の紙ジャケットのインクの匂い…、既に半世紀近くも昔のことですが鮮やかに記憶に蘇ります。よく学ぶは脇に置いて、よく遊ぶは充実していました。

そんな高校生活で最も記憶に残る体験が文化祭です。2年生の文化祭では「イスカリオテのユダ」という創作劇を、3年生で三島由紀夫原作の戯曲「癡王のテラス」を上演しました。

私はそれぞれ主役の「ユダ」と「癡王の『精神』」を演じることになりました。写真は上演後の出演者達です（2列目真ん中の癡王隣の白装束が筆者）。

たった1回の上演のために数カ月準備をする訳ですが、衣装係、舞台装置係、俳優陣が毎日のようにぶつかり合いました。個性とは集団のルールを理解した上で、そしてその集団の一員として存在しつつにじみ出る「その人ならではの動き」というのが最大の学びだったかと。

写真の背後にある舞台背景の書き割りは、切り分けてクラス全員が持ち帰りました。将来のクラス会に持ち寄ろうという意図でしたが、未だに実現はしていません。この演劇のイメージが強いのか、同級生と再会するたびに、小澤は俳優をやっているのだよねと言われましたが、その後に劇を演じたことは無いのです。しかし何故かずっと人生を演じているような気がしてなりません。

